

塗り絵をコミュニケーションツールに使った子どものための展示について — 2009 年度特別展における「ぬりえ de おめん」コーナーの実施報告 —

A Museum-exhibit Communication Tool for Schoolchildren: Coloring of Animal Mask

石浜佐栄子・大島光春・広谷浩子・田口公則¹⁾

Saeko ISHIHAMA, Mitsuharu OSHIMA, Hiroko KUDO-HIROTANI & Kiminori TAGUCHI¹⁾

Key words: museum, children, exhibit, coloring, communication tool

1. はじめに

博物館の展示をつくるにあたり、来館者を一束にして考えるのではなく、あらかじめ対象（世代）を設定できれば、展示企画の目的が達せられ、来館者に満足をもたらすことができる可能性が高い。日本の多くの博物館では、幅広い世代の人々が訪れていることが一般的である。そのため、対象（世代）ごとに展示を作るか、あるいは各世代のニーズを複合的に展示の中に取り込んでいくことを考えておく必要がある（端, 2000）。なかでも小学生以下の世代は、特に配慮しない限り、展示の対象から外れてしまうことが多い。

神奈川県立生命の星・地球博物館（以下、当館）では、年間 23.2 万人（2008 年度）の来館者数のうち、園児が 10.3%、小学生が 29.4%と、小学生以下の子どもが占める比率は 39.7%にもものぼる（神奈川県立生命の星・地球博物館, 2009）。当館には、子ども（本論中では、園児＋小学生として扱う）も楽しむことができる展示がもちろん存在するし、講座等の子ども向け普及事業も随時開催しているが、常設の展示室内に子ども向けのコーナーを設けたり、特別の配慮やアピールを施すことはしていない。特別展示を行う際には、工作コーナーを設置（出川, 2009）したり、特定の日にワークショップを開催（平田ほか, 2004）するなど、子どもが展示室内で楽しめるような工夫を凝らすこともしばしばある。しかし、これらはいずれも職員やボランティアなどのスタッフを常時配置することによって実現しえたものであり、十分なマンパワーがなければ、そのまま定常的な展示の中に組み込むことは難しい。

そこで 2009 年度の当館の特別展「木の洞をのぞいてみたら一樹洞の生きものたち」において、子どものための体験的展示スペースを設置し、スタッフが常駐しないかたちでの子どものための展示を試みた。本論では、その中でも特に、動物のおめんを使った塗り絵コーナーにおける試みの成果について報告する。なお本展示の実践の一部には、科学研究費補助金（基盤 (C)「子どものための展示開発—自然史博物館にふさわしい展示と展示プラン」、課題番号：20605018、研究代表者：大島光春）を使用した。

2. 子どものための体験的展示スペースの概要

特別展「木の洞をのぞいてみたら一樹洞の生きものたち」は、木の中につくられた樹洞と、樹洞を利用する生き物たちを紹介した展示である。子どもにも親しみやすい雰囲気との展示構成とし、また樹洞や動物を懐中電灯で照らして観察するような仕掛けを作るなど、入場者の主体的な体験を促す工夫も行った（図 1）。

特別展スペースのうち、入口から最も奥側にあたる約



図 1. 特別展示室に設置した大きな実物の樹洞を、懐中電灯で照らしながら覗き込む子ども。樹洞の中には、クマの剥製が配置されている。

¹⁾ 神奈川県立生命の星・地球博物館
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田 499
Kanagawa Prefectural Museum of Natural History
499 Iryuda, Odawara, Kanagawa 250-0031, Japan
石浜佐栄子: ishiha@nh.kanagawa-museum.jp

9 m × 4.5 m (展示全体の 1/7 程度) の床面積を使用して、スタッフが常駐しないかたちでのハンズ・オン型展示からなる、子どものための体験的展示スペース「樹洞であそぼう!」を設置した。このスペースは、子どもが森の動物になって遊べる場所を展示室内に作るというコンセプトで企画したもので、「のぞいてみよう!」「ムササビ飛んでみよう!」「ぬりえ de おめん」の 3 つのコーナーから構成される(大島, 2009)(図 2, 図 3)。「のぞいてみよう!」は、動物の剥製や画像を穴から覗く仕掛けの展示ブース(図 4)、「ムササビ飛んでみよう!」はムササビの着ぐるみを着用し、映像を見ながら滑空する気分を味わう装置(図 5)である。「ぬりえ de おめん」は、工作すると「おめん」となる動物の顔の塗り絵用紙と色鉛筆を用意したコーナーである。いずれの展示も、スタッフが常駐しないという前提で、装置等の安全性や、映像や画像を使った分かりやすい解説に配慮した。

3. 「ぬりえ de おめん」コーナーにおける試み

(1) 目的および期待される効果

「ぬりえ de おめん」コーナーの設置目的は、来館者に、展示室内にある動物の剥製(特に顔)をじっくり観察するきっかけを提供し、塗り絵という行為を楽しみながら展示物(動物の剥製)に親しんでもらうことである。塗り絵自体は、たいいてい子どもにとって経験したことのある身近なものであり、近年では大人にも「大人のぬりえ」ブームを巻き起こすなど、多くの人にとって基本的に楽しい行為だと認識されている。塗り絵という手法を使うことによって、白紙からのスケッチよりも難易度が低く、絵が得意でない人にとっても参加が促進されるとともに、細かな観察や特徴の発見が促されることが期待できる(有田ほか, 2009)。また、動物の「顔」に注目して、自ら表現し、おめんとして自分の顔に重ね合わせることで、『来館者が自分自身の理解や経験と一致するように展示を「個人化」する(フォーク・ディアーキング, 1996)』効果もあると考えられる。そこで、子どもが展示物を観察し、自ら表現して理解する、すなわち「展示物と対話する」ための 1 つのツールとして塗り絵が有効であると考え、本企画を実施した。

塗り絵の良いところは、博物館で体験するだけではなく、持ち帰ってお土産にできるところにもある。今回はただの塗り絵で終わるのではなく、簡単な工作を行うと動物の顔の“おめん”としても活用できるように設計した。そのため、博物館においてだけではなく、おめんとして自宅で再び楽しむことによって、子どもにより強い印象を残し、展示が長く記憶に留まり影響を及ぼすことが期待される。

(2) 実施手法

展示を行う動物の中から、顔に特徴があって観察に適しており、かつ子どもに親しみやすいものを検討し、ムササビ、モモンガ、フクロウ、ニホンアマガエルの 4 種類の動物の顔のオリジナルイラスト(線画)を準備した。特にムササビとモモンガは、一見似ているような印象を持たれがちだが、体の大きさだけではなく顔の特徴も異

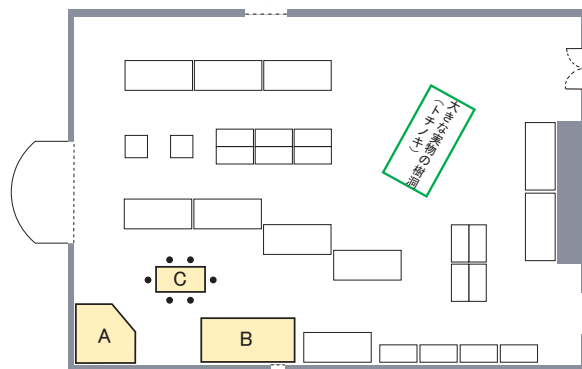


図 2. 特別展示室のレイアウト(四角は展示ケース)。図の右上が入口、左下が子どものための展示スペース「樹洞であそぼう!」に相当。Aが「のぞいてみよう!」、Bが「ムササビ飛んでみよう!」、Cが「ぬりえ de おめん」のコーナー。



図 3. 体験的展示スペースの全体の様子。



図 4. 「のぞいてみよう!」のコーナー。クイズの正解のボードを回転させて穴を覗くと、動物の剥製があらわれる。常時オルゴール音を流して注意を引き、来館者の働きかけを促した。

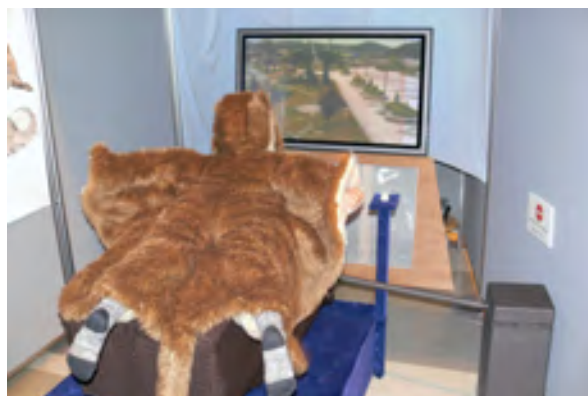


図 5. 「ムササビ飛んでみよう!」のコーナー。ムササビの着ぐるみを着用し、ムササビ目線で撮影した映像をうつぶせになりながら見て、滑空する気分を味わう。

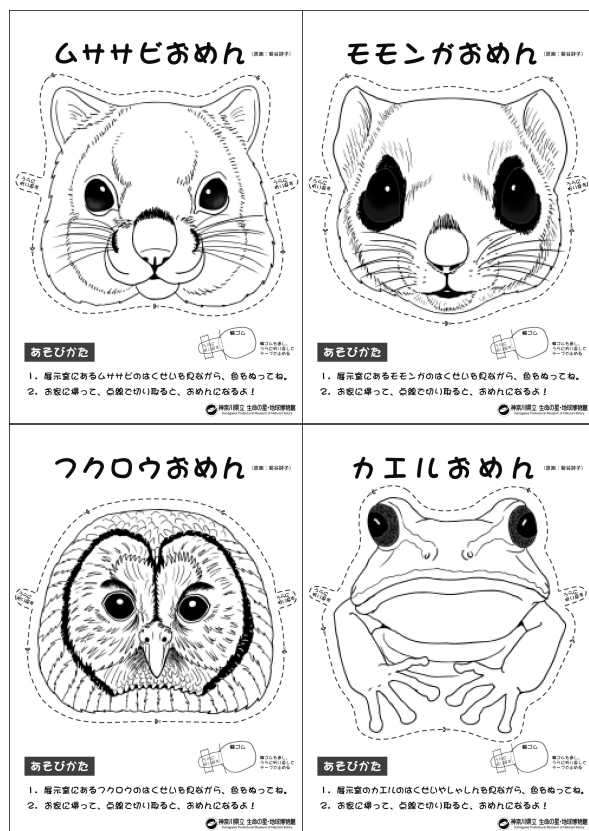


図6. 4種類の「ぬりえ de おめん」用紙 (原画: 菊谷詩子氏).
各動物をそれぞれ A4 サイズで印刷した.

なることを比較して楽しめるという観点から、両者をイラスト化の対象として選んだ。

これらの線画を、顔の大きさに合うよう調整し、おめん化するための切り取り線や注意書き等を追加して、A4 サイズに印刷した (図6)。薄いコピー用紙だと乱用されたり持ち帰られない可能性が高くなると考え、厚口プリンタ用紙 (110 ~ 130 g/m²) を使用した。切り取り線に沿ってはさみ等で切り取り、輪ゴムをテープ等で留めて耳に引っ掛けるかたちに工作すれば、動物のおめんが完成する。この用紙と画板を壁際に設置したラックに設置し、子ども用の低い机と椅子を置き、机の上に色鉛筆を用意した。来館者は、画板を使って展示室のあちこちの剥製の前へ移動して塗り絵を行うことも、椅子に座って机の上で塗り絵を楽しむこともできる。安全確保のためと、家でも引き続き体験をしてもらうため、ハサミや輪ゴムは展示室内に用意せず、博物館で塗り絵を、家でおめん作りを楽しむよう、説明を付けて促した。複数種の動物の塗り絵を展示室内に用意し、好きな動物を選んで使用してもらうことを当初は考えていたが、そうすると来館者は用意された全ての種類の塗り絵を持ち帰ろうとする傾向が強いことが分かった。予算的な制約があったため、1日につき1種類の動物のみを日替わりで展示室に置くこととし、1人1枚限りという注意書きをつけて、来館者が自由に使用できるように設置した。

塗り絵は、基本的に自分の好きな色を用紙に塗る行為であるため、何の導入もなければ、ただ好きな色を塗って終わり、ということにもなりかねない。来館者に展示物をじっくり観察し、展示物と対話してもらうため、塗

り絵と展示室の剥製を関連づけるような簡単な文章やイラストをコーナー周辺にちりばめ、展示室の剥製に目を向けさせるよう試みた。また、どのようなコーナーなのかを分かりやすく示すため、色々な人が実際に色を塗っておめんにした様々な見本をコーナー周辺に配置した。

(3) 結果

a) 参加者数および参加者の動向

特別展の期間 105 日間 (2009 年 7 月 18 日 ~ 11 月 8 日、総入場者数 82,754 人 (当館管理課調べ)) で、合計 11,979 枚の用紙が使用された。その場で参加せず家に持ち帰った人の分も含むこととなるが、用紙の使用枚数を参加者数とみなすと、期間全体で 1 日平均 114 人、来館者の多かった夏休み期間中 (7 月 18 日 ~ 8 月 31 日) では 1 日平均 164 人の参加があった。期間全体で平均すると、特別展入場者数の 14.5% (約 7 人に 1 人) がこのコーナーに参加したという計算になる。

コーナーの様子を不定期に観察して回ったところ、参加者層は当初の目的通り、園児 ~ 小学生が最も多かった (図7)。子どもと一緒に参加したり、他のコーナーで遊んでいる子どもを椅子に座って待つ間に自分が楽しんでいるような保護者も、かなり見られた。子ども連れの家族以外でも、中学生以上の学生が友達同士の複数人で、また年配層の団体が皆で参加しているような光景もしばしば見られ (図8)、子ども向けの企画ではあったが、予想以上に幅広い世代からの反応があった。



図7. 「ぬりえ de おめん」に参加する子ども。



図8. 「ぬりえ de おめん」に参加する大人の団体。互いに作品を見せ合いながら、会話をしている。

様々な世代からの参加があったものの、子どもと大人では、本コーナーに対する関わり方に違いが見られた。子どもは保護者とともに、または家族と離れて1人でも参加する傾向があるが、中学生以上の大人は、大勢でわいわいと互いの絵を見せ合って会話をしながら団体で参加する傾向が強かった。子どもは塗り絵自体と向かい合って対話している一方、大人は塗り絵を通して他人と対話しているように見受けられた。中学生などの学生世代では、まさに友達同士のコミュニケーションのために参加しているためか、塗り終わった用紙を持ち帰らず展示室内に置いて帰ってしまうこともあった。なお、その他の世代では、持ち帰る参加者が大多数だったが、小さな子どもが保護者と離れて1人で参加した場合には、置いて帰ってしまうことも、ままあった。

b) 日々の参加者数の統計

本コーナーへの参加者の動向を客観的に把握し、今後の参考とするため、1日ごとに塗り絵用紙の使用枚数の調査を行った。以下の統計では、複数種の動物の塗り絵を展示室内に用意した展示開始直後の数日間を除いた、1日につき1種類のみの塗り絵を置いた日の調査結果について扱う。

参加者数（塗り絵使用枚数）を、特別展への日々の入場者数（当館管理課調べ。特別展入口に設けた自動カウンターによる。ただし入場者が出入りを繰り返した場合は複数人としてカウントされるため、実際の入場者数よりも多く見積もられている可能性がある）との関係で見ると、入場者数が増えるに従って、「ぬりえ de おめん」参加者数もほぼ比例的に増える（図9）。特別展入場者数に対する参加者数の比率（参加者数／特別展入場者数×100）を曜日ごとにみると（図10）、夏休み期間中は曜日に関わらず10～20%、夏休み期間以外の休日（土日祝日）も同様の10～20%（連休かどうかには左右されない）であった。一方、夏休み期間以外の平日は、子どもの入場者の比率が特に少ない日に参加者数の比率がばらつき、入場者数が際立って少ない日には比率が高くなることもあるが、全般に夏休みや休日より低めの5～15%程度となる。子どもにとっての休日である休校日（夏休み期間中+土日祝日）と、平日とでは、参加者数の比率に差があることが分かった。

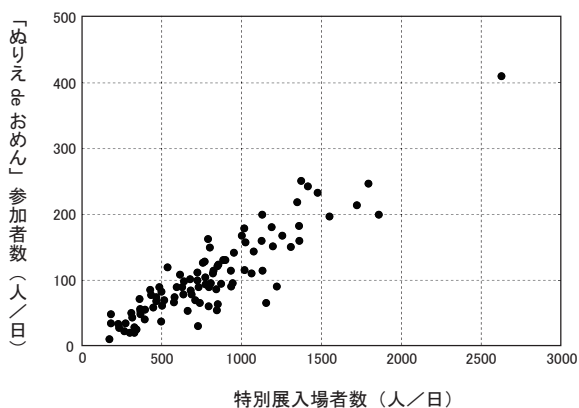


図9. 特別展「木の洞をのぞいてみたら」の1日ごとの入場者数と、「ぬりえ de おめん」の参加者数（塗り絵使用枚数）。

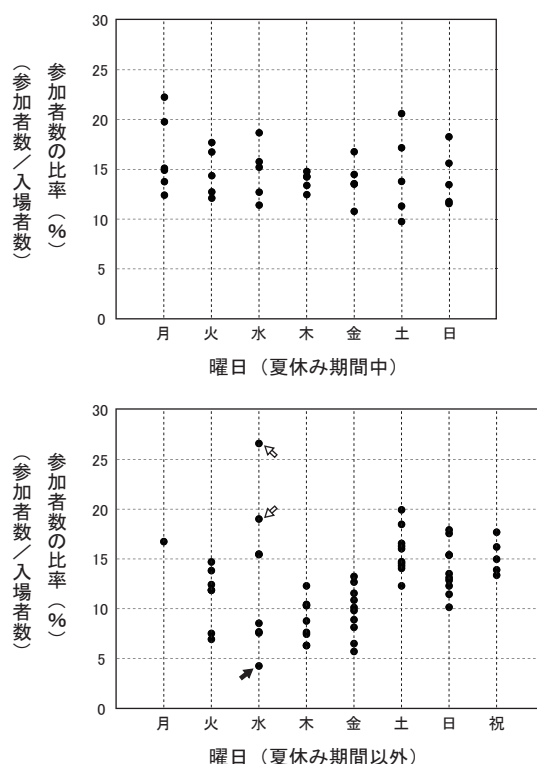


図10. 曜日ごとにみた、特別展入場者数に対する参加者数の比率。夏休み期間中とそれ以外に分けて集計。夏休み期間以外の月曜は休館だが、11/2のみ飛び石連休の中日のため開館した。夏休み期間以外の平日で参加比率が特に高い日（白矢印）は、いずれも特別展入館者数が180名程度と非常に少なく、うち子どもの比率が25%以下と低い日。参加比率が5%以下と特に低い日（黒矢印）は、特別展入場者数は730名と普段通りで、子どもの比率が20%と期間中最も低い日に相当する。

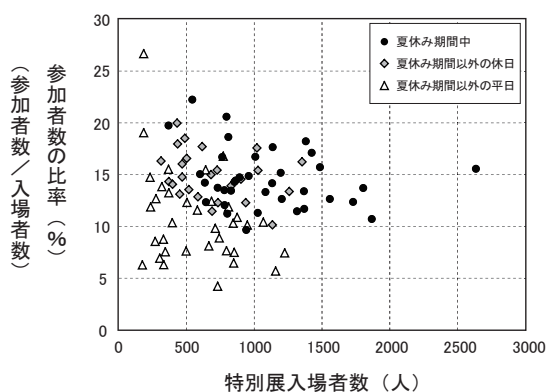


図11. 特別展入場者数と、参加者数の比率の変化（期間別）。

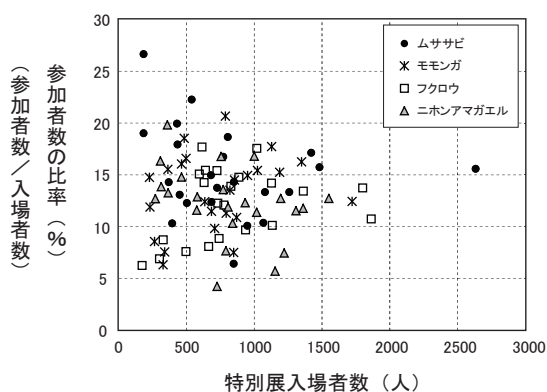


図12. 特別展入場者数と、参加者数の比率の変化（動物の種類別）。

表 1. 4 種類の動物による、入場者に対する参加者数の比率の違い（各日の平均値）.

	ムササビ	モモンガ	フクロウ	カエル
参加比率の平均 (%)	15.2	13.3	12.1	12.2

なお、特別展入場者数の増加に対しては、参加者数の比率はそれほど大きくは変化しなかった（図 11）。また、動物の種類による参加者数の比率の変化は、多少の差はあったものの、それほど大きくはなかった（図 12, 表 1）。

c) 剥製を用いた塗り絵ワークショップ

今回の試みでは、コーナー内に動物の剥製を置くことはしなかったが、剥製を目の前に置いた場合に子どもの塗り絵行動がどう変化するかを観察するため、8月9日（日）、9月12日（土）、10月17日（土）、11月8日（日）の4日間、各2～3時間程度のワークショップを、展示室内の「ぬりえ de おめん」コーナーにおいて実施した（図 13）（総参加者数 173 名）。事前の広報などは行わなかったため、参加者は通常の日と同様の入場者層である。このワークショップに関しては、スタッフがコーナー内に常駐し、4種類すべての動物の塗り絵用紙と剥製を用意して、好きな動物を選べるようにした。

机の上に剥製を置いてみたところ、スタッフが促さなくても、ほとんどの子どもが塗り絵と動物の剥製との関係を理解し、自発的に剥製を観察しながら塗り絵に色を塗った（図 14）。特に混雑していたり保護者に急かされたりしていない場合は、こちらが驚くほどの長い時間（平



図 13. 塗り絵ワークショップの様子。



図 14. 剥製を観察しながら、塗り絵を行う子ども。



図 15. 塗り絵ワークショップで実施した、おめんを付けての展示室内での記念撮影。インスタントカメラを使って撮影し、写真をお土産として参加者に渡した。

均 15 分以上）をかけて、集中して丁寧に塗る子どもが相当数にのぼった。なおワークショップ中は、塗り絵だけでなく、はさみで切り取っておめんのかたちに完成させ、その場でかぶって記念撮影なども行えるようにした（図 15）。当日は動物のおめんをかぶった子どもたちが展示室内を歩き回ることとなり、来館者も展示の中に溶け込み、展示として参加するような効果も生み出した。

(4) 考察

a) 展示物との関連づけに関する工夫と課題

本コーナーの目的は、塗り絵を通して動物の剥製をじっくり観察するきっかけを提供し、展示物に親しんでもらうことにあった。そのため、塗り絵と展示室の剥製を関連づけて、展示室の剥製に目を向けさせるよう試みた。まず、画板を使い展示室内の様々な場所へ移動して塗り絵を行うよう説明書きで促したが、画板を持ってコーナーから離れさせることは、実際にはかなり困難であることが分かった。座って塗り絵ができないよう、一時的に椅子の撤去も行ってみたが、参加者は立ったまま、あるいは床に膝をついても、やはり机の周辺で塗り絵を行う傾向は変わらなかった。そこで試しに、博物館で実施した講座の参加者に対し、画板を使った展示室内各所での塗り絵を体験してもらった（図 16）。その結果、大人にとっては可能であるが、子どもにとって、画板を使って不安定な体勢で最後まで集中して塗り絵を完成させることは難しいことが分かった。



図 16. 博物館の講座の参加者に対して実施した、展示室内での画板を使った塗り絵の試みの様子。

子どもを集中させるためには、やはり椅子に座るなど落ち着いた体勢を取らせる方が望ましい。そうだとすると、展示物と塗り絵を関連づけさせるには、展示物をコーナー周辺に配置する必要が出てくる。展示構成の関係上、4種類の動物の剥製をコーナー内に配置することは不可能だったので、該当の動物の写真を周辺にさりげなく配置したところ、その写真を見ながら色を塗る参加者も現れた。しかし、周辺に配置した見本のおめんとを真似して塗ってしまう参加者も多く、“見本通りに塗る”ことに重点が置かれてしまう傾向があったことは否めない。コーナーから離れた場所にある展示物との関連を気づかせることは容易ではなく、展示物の配置や、見本と説明の置き方などの点で課題が残った。

ワークショップに参加した子どもの様子からは、剥製を目の前にして座って塗り絵ができる状況に置かれれば、スタッフからの促しがなくても、子どもは能動的に観察し、表現し、対象物と対話できることが分かった。今回は展示構成の関係で実施できなかったが、展示物を目の前にして落ち着いて作業できる状況を展示室内に作り出すことができれば、スタッフが常駐しなくても、塗り絵が来館者と展示物との対話のツールとして有効に作用できる可能性は高いことが示唆された。

b) 参加者数の比率を左右する要因

展示室内の人数が増えても、参加する比率はさほど変わらなかったことから（図11）、今回の特別展入場者数の規模では、展示室内の人数（混雑状況）は参加するかどうかの意思決定に対して基本的に大きな影響を及ぼしていないといえる。また、ワークショップの様子や来館者の声などから各動物の人気の差が予想されたが、実際に塗り絵に参加するかどうかは、用意された動物の種類によってそれほど左右されなかったことが、統計データからうかがえる（図12、表1）。特別展期間中に複数回訪れたリピーターが、前回と異なる種類の塗り絵を楽しむ様子もしばしば目撃されており、来館者はどの種類であれ、用意された塗り絵を楽しんでいた。

参加者数の比率を有為に左右したのは、子どもにとっての休日である休校日（夏休み期間中＋土日祝日）であるかどうかである。前述のように、夏休み期間以外の平日における本コーナーへの参加比率は、休校日（夏休み期間中＋土日祝日）よりも低い。その理由として、まず、平日には子どもの入館者が少ないためではないかということが考えられる。しかし、9～11月の平日は、秋の遠足シーズンで学校団体の来館があり、決して子どもの入場者数が少ない日ばかりではない。特別展に入場した子どもの数は直接統計を取っていないが、特別展に入場した無料入場者（園児、小学生、中学生、障がい者、招待券使用者などを含む）のうちの、博物館に入館した無料入館者中の子ども（園児＋小学生）の比率から推定*すると、むしろ特別展入場者のうちの子どもの比率は、休日よりも高い日が多い（図17）。それにもかかわらず、

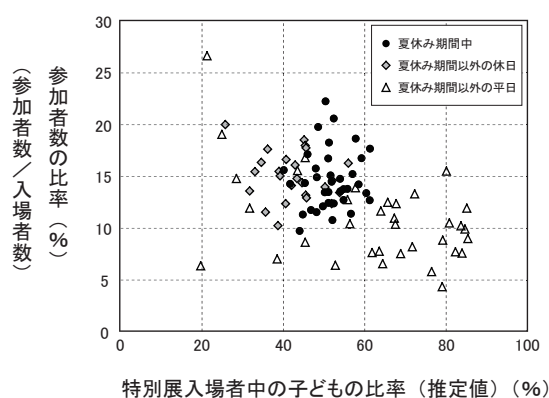


図17. 特別展入場者中の子どもの比率（推定値）と、参加者数の比率。

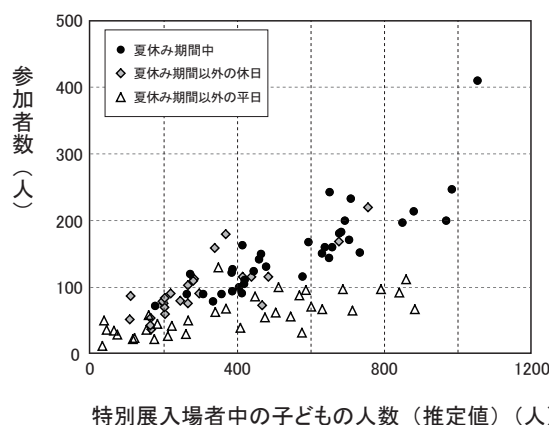


図18. 特別展に入場したと推定される子どもの人数と、参加者数の関係。グラフの横軸は自動カウンターの数から推定した値*であり、展示室への出入りが繰り返された場合は、実際の人数よりも多く見積もられている。

参加者数の比率は伸びておらず、平日の参加比率が低いのは子どもの入館者が少ないためとはいえない。特別展に入場した子どもの数と参加者数の間には相関があり、子どもの数が増えるほど参加者数は増えるが、休校日と平日では傾向が異なり、休校日に来館する子どもの方が明らかに参加する比率が高い（図18）。同じ子どもでも一括りにして考えることはできず、休日に家族連れで来館する子どもと、平日に学校団体で来館する子どもでは、本コーナーに対する参加意欲が異なることがうかがえる。なお、園児と小学生の来館者数の割合は、休校日で1:1.5～1:3程度と小学生の方が多く、平日は1:0～0:1近くまでばらつきが大きくどちらが多いとも言えないが、園児のみ、小学生のみの人数で見ても、上記と同様の傾向が見られた。

c) 休校日と平日の子どもの塗り絵に対する行動の違い

休日に家族連れで来館する子どもに比べて、遠足など学校団体で訪れる子どもは、なぜ本コーナーに参加する意欲が低いのであろうか。館に滞在する時間が限られているためや、行動を監視する引率者からのプレッシャーのために、椅子に座ってじっくり作業をしようという気にならなかったのかもしれない。だがそれにしても、学校団体の子ども同士が、大人の団体のように互いの絵を見せ合いながら参加したり、塗り絵を友達とのコミュニケーションツールとして使用する傾向が見られなかった

*

（特別展に入場した子どもの数（推定値））

$$= \frac{\text{（特別展無料入場者数（カウンタで計測））} \times \text{（無料入館券を発売した園児＋小学生の数）}}{\text{（無料入館券の発券数の総計）}}$$

ことは、興味深い。子どもにとっては、塗り絵というツールが個人的に没頭するためのものであり、友達と体験を共有してつながりを強める役割を果たすもの（子ども同士のコミュニケーションツール）とはみなされなかったともいえる。

しかし、塗り絵が子どもにとってのコミュニケーションツールとして役に立たなかったのかというと、そうでもない。家族連れで来館した子どもの場合は、保護者からの語りかけによって、家族で対話をしながら塗り絵を行うことが多かった。対話によって動物の特徴や展示物との関連に気づくなど、参加体験が深まることも多く、家族間、特に親（大人）と子どもの間でのコミュニケーションツールとして有効に活用されている現場を度々目にした。大人の介在によって、塗り絵が、子どもにとってもコミュニケーションツールとして活用される可能性が高まると考えられる。

(5) まとめ

「ぬりえ de おめん」は概ね好評で、子どもをはじめとした幅広い世代の、約 12,000 人もの来館者に参加してもらうことができた。机と椅子を設置したことによって、休憩がてら参加してみるという、本来であれば参加しなかったかもしれない非積極的な層を取り込む効果もあったと推定される。塗り絵を楽しむ人以外にとっても、展示室内でゆったりと過ごすことができる空間を作り出したことで、結果的に来館者の滞留時間の延長に貢献することができた。

展示構成に合ったオリジナル塗り絵を準備し、展示物と関連づけてコーナーを設定したことで、ただの塗り絵に留まることなく、塗り絵の対象となる動物に興味を持ち展示物に親しむという目的は、ある程度達成できたと考えられる。「展示物との対話」という観点では、展示物や見本の配置や説明方法などの点で課題が残った。しかしワークショップでの試みから、展示物の配置など設定の工夫次第で、たとえスタッフが常駐しないかたちであっても、塗り絵という手法が、子どもが展示物との対話するためのツールとして有効に活用されうる可能性が示された。

参加者の観察を通して、この塗り絵という手法が「展示物との対話」のほか、同伴者とのコミュニケーションツール、すなわち「人との対話」の道具としても有効に活用されることが分かってきた。来館者が展示物をじっくりと観覧し、博物館での体験を印象深いものとして持ち帰るには、同伴者とのコミュニケーションや体験の共有が重要な役割を果たすと考えられている（フォーク・ディアーキング, 1996; 広谷, 2005）。特に家族で博物館を訪れた子どもにとっては、保護者との対話、体験の共有の有無によって、展示体験に対する印象深さが全く違うであろうことは、想像に難くない。「ぬりえ de おめん」は、博物館で家族と体験を共有すること、更に家に帰っておめんを作りながら再び家族と対話することで、コミュニケーションツールとしての役割を果たし、展示室での短い体験にとどまらない印象深い体験として記憶に刻まれることが期待される。スタッフが常駐しなくても、

同伴者同士のコミュニケーションを促進するような展示であれば、豊かな博物館体験を来館者に提供できる可能性が高いといえるだろう。

4. 今後の「子どものための展示」開発に向けて

2009 年の特別展において、「ぬりえ de おめん」など 3 つのコーナーからなる体験的展示スペースを設置し、スタッフが常駐しないかたちでの子どものための展示を試みた。子どもの頃の博物館の印象は、大人になっても記憶に残るものであるし、大人になってその博物館経験が生きてくる（大月, 2008）。また幼い頃から博物館という環境に慣れ親しめば、自然に博物館を自分たちのものとして考えることにもつながる（柘植, 1998）。入館者のうち決して少なくはない割合を占めている子どもに対して、博物館は試行錯誤しながら子どものための展示の開発を続けていく必要があるといえるだろう。

子どものための展示とは言っても、子どもだけが楽しめる展示を作ろうというわけではない。博物館における体験は、前述のように、同伴者とのコミュニケーションの中で育まれるという社会的な側面がある。子どもは、保護者が博物館との仲介者となり、一緒に展示を共有できたときに最も良く学べると言われている（三木, 1999; コールトン, 2000）。子どもにとっての保護者との対話や体験の共有の重要性を考えると、博物館に慣れていない大人も楽しめる展示、親子が一緒に学べるスタイルの展示が望ましいといえるだろう（三木, 2000）。特に、今回のようにスタッフが常駐しない展示の場合、保護者の働きかけによって、子どもの参加体験が深まる効果は大きいと期待される。保護者がスタッフの代わりとなって子どもの体験の手助けができるような、大人向けの解説などを用意するなどの仕掛けがあると、展示がより有効に機能するのではないかと推察される。

また、今回明らかになったことの一つに、休日に家族連れで来館する子どもと、平日に学校行事で来館する子どもでは、同じ展示に対しても関わり方が異なっていたということがある。「ぬりえ de おめん」の場合、学校行事で来館する子どもに対しては、家族連れの子どもの対するほどアピール力がないということが分かった。スタッフが常駐する展示では、スタッフとのコミュニケーションを通して展示への関わりを深めることができるが、スタッフが常駐しない展示ではそれができない。そのためスタッフが常駐しない展示では、誰と一緒に訪れるかという社会的コンテクストがより強く子どもの行動に影響を及ぼし、その展示を同伴者とのコミュニケーションにどう利用できたかが展示の印象を大きく左右していることも考えられる。同じ子どもであっても、家族連れで訪れる子どもに対してと、学校団体で訪れる子どもに対してでは、異なる切り口での展示方法を考えていかなければならない可能性が高い。今回の試みの結果をもとに、今後更に子どものための展示開発についての検討を進めていきたい。

謝 辞

本展示の実践には、当館学芸員の加藤ゆき氏、特にワ

ークショップに関しては当館ボランティアの高橋里恵氏、草山清美氏にご助力頂いた。塗り絵の原画は、サイエンス・イラストレーターの菊川詩子氏にご提供いただいた。また当館学芸員の平田大二氏には、粗稿に対して有益な助言を頂いた。記して御礼申し上げる。

引用文献

- 有田寛之・高橋みどり・高田浩二・三宅基裕, 2009. 科学系博物館の展示を活用したぬりえの開発. 平成 19 ~ 20 年度科学研究費補助金(基盤研究 A) 研究成果中間報告書「科学リテラシーの涵養に資する科学系博物館の教育事業の開発・体系化と理論構築」, pp.9-18.
- コールトン, T., 2000. ハンズ・オンとこれからの博物館. 256pp. 東海大学出版会, 東京.
- 出川洋介, 2009. 菌類をテーマと下 2006 年度特別展の開催記録. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (38): 31-44.
- フォーク, H.・ディアーキング, D., 1996. 博物館体験. 215pp. 雄山閣, 東京.
- 端 信行, 2000. 今、なぜ展示技法の開発なのか. 国立民俗学博物館調査報告, (16): 5-25.
- 平田大二・新井田秀一・山下浩之・田口公則・佐藤武宏, 2004. 特別展「人と大地と—Wonderful Earth—」の開催記録と自己検証の試み—博物館における新しい地学教育を目指して展開した展示活動—. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (33): 67-90.
- 広谷浩子, 2005. 来館者の行動観察をもとにした博物館の利用状況の分析. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (34): 55-60.
- 神奈川県立生命の星・地球博物館, 2009. 神奈川県立生命の星・地球博物館年報第 14 号(2008 年度). 109pp.
- 三木美裕, 1999. 体験型の展示手法を導入する意義—個人的体験からの考察—. ミュージアム・データ, (45): 1-6.
- 三木美裕, 2000. チルドレンズ・ミュージアムの歴史. 国立民俗学博物館調査報告, (16): 261-268.
- 大島光春, 2009. 子どものための展示を考える. 自然科学のとびら, 15(3): 23-24.
- 大月ヒロ子, 2008. 子どもにとっての博物館の第一印象……まずはそこから考えてみよう! 博物館研究, 44(1): 14-17.
- 柘植千夏, 1998. 子どもの博物館の機能に関する一考察—メッセージ伝達機能を中心に—. 博物館学雑誌, 23(2): 25-36.

(受付 2009 年 12 月 2 日; 受理 2010 年 1 月 27 日)